世繼曾我

序五月闇峯に照射の狩衣。裾野の草の葉末まで。靡かぬ方もあらざりし源氏のオロシ御代こそ目出度けれ。地扨も兵衛佐頼朝卿。淺間三原野那須野の原朝妻の狩座より。直に富士野に卷狩あり思ひ〳〵に小屋打たせ。君を守護し奉れば。さしもに廣き富士の根にフシ錐を立つべき地なし。地爰に一年工藤左衛門に討たれし河津の三郎が二人の子。曾我の十郎祐成同五郎時致は。夜前假屋に亂れ入り敵祐經を討了せ。御所の侍二百餘人に傷を負ふせ祐成は討死し。時致は生捕られ明くれば建久四年。五月廿九日にぞ遂にオクリへ御前に引かれける。地頼朝御覽ぜ曾我の五郎とは彼が事か。誠に親の敵を狙ふ事。理と言ひながら折もこそあらめ頼朝が。狩場にての狼藉甚だ奇怪なりと宣へば。時致頭を下け上意御尤に候さり乍ら。此の年月野路山路宿々泊泊迄心を盡し候へども。敵は小勢で通れども五十騎百騎を召連れ候。我々は兄弟二人連れざる時は只一人。其の猛勢を恐るゝには候はねども、折を窺ひ延引致し只今に至り候と。憚なく申しけり君聞召し。詞ヲヽ實にそれはさもあらん。して又此の事を曾我の母には知らせけるか五郎聞きも敢ず。こは日本の大將軍の仰とも覺えぬものかな。地を走る。獸空を。翔る翼まで子を悲しまぬはなきものを。況してや人の親として只今死に參るといふを悅ぶ親や候べき。地いやはや興がる上意かなとフシ嘲笑。うてぞ申しける。地理なれば頼朝もしばし頷き宣ふは。詞尤も祐經は敵なれば然もあらん。頼朝には何の意趣ありて側近く亂れ入り。剩へ近習の侍斬散せしは何事ぞ時致承り。さん候祐經を討たぬ間は木にも草にも心置かれ命惜しく候ひしが。地討了せての後は千騎萬騎をも微塵蠅蟲とも存ぜぬ所に。御所中の侍達やれ夜討こそ入りたれと。狼狽まはるが可笑さに。そつと太刀風をあてたるばかりにて御座候。詞さり乍ら面傷は一人も候まじ。地それにても傷癒えば。面押拭ひ罷出で御奉公や仕らん。詞扨又君の御事は正しく祖父伊東が敵。地其の上日本の大將軍。鎌倉殿を討奉りしと閻魔の聽に訴へば。一つの罪や遁れんと思ひ恐れ乍ら御佩刀の刃と。時致が錆太刀の刃を試して見ん志にて駈け入つて候に。口惜しや運盡きて。是なる五郎丸を女と思ひ油斷して。やみ〳〵と生捕られし君の。御運の目出度さよ。地五郎丸だになかりせば御首を賜はり。それより切つて出るならば。恐らく關八州に人種は置かじをと。且は怒り且は恨みフシ言葉ゞしく言上す。地頼朝大きに感じ給ひあれ聞給へかたゞ〳〵。猛將勇士も運盡きぬ

れば力なし。叶はぬ迄も助からんと恥を捨てて陳すべきに。つゆちり命を惜まず言葉を飾らぬ心底は。遽武士の本意餘の者千騎萬騎よりはと。雙眼に御涙を浮べさせ給ひければ。伺候の大名諸共にッシ各々。袖をぞしぼらるゝ。其の後仁田の四郎忠綱を召され。兄十郎が首を時致に見せよとの上意。畏つて忠綱は村千鳥の直垂に。祐成が首を据ゑ時致が前に置く。今迄はさしもに勇む朝顔の日影に萎む如くにて。悄々と押俯きッエッ暫し涙に咽

びつゝ。地あゝ情なく早くも變らせ給ふ御有樣やな。幼少竹馬の曉より。敵を討ちし夕まで一所とこそは契りしに。口惜しくも長らへて死出の旅路に後れしよなァ、斯くあるべきと知らずして。深入りせし後悔やと言ひも敢ず咽返り。こぼるゝ涙を押へんとギンすれども繩の强ければ。膝に顔を押付けて消え入るばかり。に泣きにけり。地君を始め奉り。上下の侍繩取までフシ至極の。涙にしづまるゝ。地重ねて仰出さるゝは。前代未聞の勇士なれ

ば。死罪を宥め召使ひたく思へども。傍輩の嫉み詬辱が親類の意趣かれこれ以てのがれ難し。構へて頼朝に恨を遺すなはや首討てと宣へば。時致につこと笑ひさも嬉しげにあたりを見廻し。調如何に人々。地親の敵を討了せ。其の上斯る上意を受け何しに命の惜しからん。この縛は孝行の佛の御手の善の綱。皆手をかけて結縁あれさらば。さらばと暇乞ひ心靜かに引出され。遂に屍は夏の野の草葉の露と消ゆれども。譽は富士の上もなきオクリ雲るに〳〵名こそ揚げにけれ。地扨梶原源太景季を御前に召され。明日は鎌倉に歸るべし。就ては此の度供せし武士を花やかに出立たせ。とめたりし鳥獸を名乘らせて見物せん。即ち新開の荒四郎奉行にて帳に記させよと宣へば。畏づて候と射翳々々を三度〳〵ふれにけり去る程に。地頼朝公井樓高くしつらはせ。直白の幕打たせさも大樣に坐し給へば。左は老中御小姓花を飾りて見え給ふ。地さて國々の諸侍。思ひ〳〵の狩裝束駒の鼻を立て並べ。裾野を狹しと控へたり。中にも新開の荒四郎棟梁賜はり大紋の袴を結んで肩にかけ筆取一人隨へて。御座の右手に伺候してオクリ次第々々に留めたりけり。舞コハリフシ先づ一番に春日野や。若紫の裝束白猪の行縢たぶやかに。葡黃の裏打つ竹笠木枯に吹き反させ。陸奥立の荒駒に乘つたる武者は誰人ぞ。狩場の獲物は如何に〳〵。太夫さん候某は。先年我が君七騎にて敵に襲はれ給ふ時。寄るべ定めぬ泡沫の安房の國龍崎にて。甚だ忠を勵みたる土肥の彌太郎遠平。一昨日の勢子いれに。猪と引つ組んで早速とめて候と。名乘つて通れば筆取はやがて斯くとぞ記しける。ツレ二番に褐布の裝束錦襴の小手をさし。白熊の敷皮下け宿月毛の馬に咽巻を掛けさせしは。あつぱれ出立や誰そや誰そ。太夫誰そやとは人がまし。又申すも如何なり。名乘るもさすが恥かしの盛長にて候を。誰にまがへて藤九郎。鹿三頭と答へつゝ。靜かにこそは通りけれ。ツレ地三番は木賊色。秋の野摺つたる狩衣大口のそば高く取り。尾花蘆毛に片手綱オクリゆられ〳〵出でたる若侍。假名實名名乘られよ太夫名乘れとはなのりその浪のまにまに。藻鹽燒く三浦の。平六兵衛吉村。二つ連れたる飛び兎ほつかけ。ほつかけ峰を分け谷へ下つて駈進へ。其の德兩手に引つ掴み上覽に入れしかば。汝ば襲や有るらんと御畝にあづかりし。今更申すも事くどしと。フシさも大樣にぞ打たせける。舞さて其の次に。梨打烏帽子に鉢巻し村濃の袖標。鹿子の行縢くゝり下け足利樣の染手綱。鞭に取添へ繰りかけし馬上の達者は實に誠。秩父の重安候な太夫ヲヽ。何と包まん隠れなき園生に植ゑし紅の。染羽の矢先に翔鳥を二つ續けて射て落し。見巻には偏へねど證人紛れ候はず。お帳に頼み存ずるなり。ツレ〳〵實に。尤と夕まぐれ。雲立涌の狩衣青皮の尻鞘掛けたる太刀。雲雀毛の馬に淺黃の厚總かけし

は如何に。太夫これは信濃の國相澤の彌五郎猪一頭射止めてさふ。ッレ續きて小松の摺衣。露を含めて絞りあげ。徒歩立の弓杖は誰人の家人ぞや。太夫さん候上にも聞て知しめす。秩父が郎黨本多の次郎近經去んぬる廿日の朝山に。御厩の德付が手負猪に追立られ。今を限りと見受けし時。尾上を横に走り着け猛つて威せる荒れ猪の。片脛とつて引伏せ草分を三刀に。突留め申して候ひしをこがましう候へども。御辱ねなればと地會釋して。人留居にぞ入りにける。ッレ地跡より乘つて出でしほの。流石氣高き亂れ髪。額に滿てる月の顏。二八ばかりの若武者は。いづかたの御曹司聞かまほしやとのゝめけば。太夫地抑これは。村上天皇の後胤木造の忍ぶ丸。富士川の岸行く鹿。跡より追つかけ先へ廻り向ふを射止めて候と高聲に呼ばはつて。手綱かいくりしんづ〳〵。かつし〳〵と歩ませしはオタリゆゝしへかりける風情なり。ッレ地八番に絲毛の腹巻斑の駒に目結の手綱一際すぐれて出立ちしは誰人なるぞ。誰やらん。太夫されば候某は。昨日まで御所の五郎丸。今朝元服御許され荒井の藤太重宗と名乘り候。此の度の狩座に。さまでの事はあらねども。鬼神といはれつる曾我の五郎を生捕り候。御帳に記し給はれと打つて過ぐれば荒四郎ッレヲヽ。比類なき御手柄。御身は曾我に十倍ぞとやがて帳にぞ書かせける。二人扨其の外甲斐源氏。三浦の一黨伊勢平氏。坂東坂西北陸道。南は紀の路八庄司在鎌倉は云ふに及ばず大名小名。都合十萬六千餘騎。駒も千年を斷ゆれば。我が君の御威勢知るも。知らぬもおしなべて萬々年とぞ三番祝ひける。かゝる所に地朝比奈の三郎義秀遠侍に控へしが。ずか〳〵と立ち出で新開が傍にむずと坐り。ッレこれ荒四郎。見れば御身には目も耳もあるが聞えぬか見えざるか。何とも不審晴れずといへば新開氣色を損じ。なに某を聾か盲かとは侮つたる言分かな。聞えぬか見えざるか汝が眼に見えよと片肘立ててぎゝめけども。朝比奈事ともせずいやさ。なんぼう急かうと儘汝に目も耳もあらんとは先づ此の朝比奈は思はず。合點行かずば語つて聞かせん耳垢を取つてよつく聞け。して今日の結構は何事とか思ふ。此の度御狩にとめたりし猪鹿鳥の物數を留めよとこそ上意あれ。何ぞ御所の五郎丸が時致を生捕りしを帳面に記す事。何時の間に時致が猪にばしなりけるぞ鳥にばしなりけるぞ。やれ。眼も耳もあらばとつくと聞け。曾我は三浦の一家なれば我々とても逃れぬ中。其の上兄弟が働き日本無雙の侍と君も御褒美なされしものを。汝等が分にてよくも〳〵蓬生にはしけるよな。いで人を殺しても猪鹿同然ならば。幸かな汝を斬り此の。朝比奈も御狩にて新開の荒四郎一疋と記されんと飛んで懸れば。地人々慌て押し隔て御前なるにさりとては。鎭まられよと兩人を先づ雙方へ引分くる。地君仰せ出さるゝは朝比

奈が申し條一々道理至極せり。さり乍らか、ほど目出度き鎌倉入りなれば是非堪忍せよとの御諚にて。奥をさして入り給へばさしもに勇む朝比奈も。御一言にめでやれ汝ばら。詞上意なれば先づ只今は免し置く。誠に曾我の五郎は命助かるべき者なれども。君御料簡の上にて誅せらるれば誰に恨はあらざるに。今日の帳面に五郎丸が時致を止めたりと付くからは曾我が敵は五郎丸。地重ねて曾我の所縁あらば此の朝比奈が後見し。必ず狙ひ討たすべし新開とても危しと地ツメはつたと睨んで罵れば。始めは言葉荒四郎後には。わぢわぢ懍ひつゝ先へ心は急けども。ギン跡も中々氣遣はしく見返り。見返り退出す朝比奈が言葉の末。尤も理頼もしゝ心地よしとも中々申す。ばかりはなかりけり。

第二

曾我兄弟の郎黨兄に鬼王。弟に團三郎。彼等二人の者どもは。祐成や時致がまだいはけなき頃よりも。影の如くに附き從ひ共に敵を狙ひつゝ。此の度の落着に是非二世迄も御供と。たつて望み申せしかど。祐成も時致も母の御事氣遣はしく。最期の供を許さねばスエテ及ばず。兄弟は。地形見の品々取り持つて。空しき駒の口を取り。フシ泣く泣く曾我へぞ歸りける。地斯る處に若侍暫し〳〵と呼びかけ。詞いづれもは曾我殿の御家人鬼王團三郎殿にてましますか。これは朝比奈の三郎義秀よりの御狀なりとぞ出しける。地何事かは存ぜねどもと鬼王押戴き披き見れば。詞何々方々が主人曾我兄弟は。君御料簡あきらかなる上何れに仇を殘さず相果てらるゝと雖も。仔細ある事にて新開の荒四郎。並に御所の五郎丸今元服して荒井の藤太重宗と名乘り。此兩人曾我の敵に相極まる。御分等兄弟の内一人は曾我へ歸り老母に仕へ。一人は早々鎌倉へ歸らるべし。義秀が手引を以て重宗荒四郎を討たすべし疾く〳〵とぞ書かれける。地兄弟大きに悅び先づ使者に一禮述べ鎌倉に歸し。詞やれ團三郎。此の上は某鎌倉へ取つて返し重宗荒四郎等を討つべし。御邊は曾我へ參り御形見をも奉り。御老母樣を育み申せといへば團三郎聞きもあへず。地いやいや某は若輩者にて御母君への勞りは。中々かなひ候まじ御身兄の役なれば。おとなしやかに歸り給へ某敵を討たんといふ。詞鬼王重ねていやさ。故郷の事は內證づく。眼前主人の敵を討たで侍が立つべきか。地是非に御分は故郷へ歸れ團三郎眉をひそめ。詞ム、何主人の敵を討たでは侍が立たぬとや。これ兄者人。左樣の事を知り乍ら我を故郷へ歸れとは。ヲヽ嬶て心得たり。曾我殿の下人こそ兄は心健氣にて主の敵を討ちけれど。弟は臆病者にて逃げ歸りしと人に笑はせん巧よな。地弓矢八幡其の手は喰はぬならぬ〳〵と顏打振つて。フシ歸らん氣色はなかりけり。地鬼王重ねて、ヲヽ聞き得た

りさ り乍らそれは以ては同じ事和殿鎌倉へ歸り某故郷へ參りなば。弟は心剛なれども兄は腰が抜けたりと。世上の人に笑はれんは御邊も同じ恥ならめ其の上此の狀にも。一人は故郷へ歸り御老母を育み。一人は下れとあれば是非此の上は理を非に枉げ。お事歸れと云ひければ團三郎色を變へ。團はてくどい事身はくだ〳〵に刻まるゝとも故郷へは歸らぬなり。誠左程に思召さば御身も我も連れて下らんとぎぎめけば鬼王今は堪へ兼ね。エゝこれ程事を分けて言ふに兄の言葉を聞入れず二人つれだち下らんとは。必定某一人にては得討つまじきと思ふか團三郎拗者なれば。ヲヽ近頃申し惡けれども御身一人では危し〳〵といへば鬼王肘を張りはつたと睨み。汝兄に向て粗略千萬七生迄の勘當と牙を嚙んで怒りける。いや異な事を力まるゝものかな。御身の勘當が恐ろしいとて男の道を捨つべきか。勘當がしたくばせられゝ此の方からも勘當ぞ。地追つ付け敵の首を取り御身が顏に投付けんといへば。ヲヽ其の口を忘るゝな。某が打付けらるゝか汝が眼に張付けるか。此の上は運試し。それ迄は音信不通兄とも思ふなヲヽ弟とも思ふなと。怒つて左右へ別れける。所存の程こそ三重へやさしけれ フシ實にうけ難き。地人の體を受けながら。例すくなき川竹の。流れの身こそ フシ定かならね。思ふも思はざりつるも。夜毎にかはる憂き枕。辛きながらも勤とて。朝な夕なの化粧坂無慚やな少將は五郎に深く相生の。松は根毎に顯はれて。姉女郎や傍輩のさがなき口にかけらるゝ。抱主が堪いて逢はせねば。ハルフシ猶手も足も。なよ付の虎にかくとぞ。フシ示しける。元より虎は戀知りの。長地此の身も同じ憂さつらさせめて語り慰まんに今宵や行きて大磯の。勤の隙に忍び出で フシしやらり〳〵と露踏めば。鼻緒もぬるゝ濡姿。化粧。坂にぞ着かれける。地折しも少將籠に出で。よくぞ〳〵此方へと常のオクリへ塵數に伴ひて。地妾參りて申さんにお志の程こそ嬉しけれ。扨御存じの如く五郎樣と我が事は。いかう譯ある挨拶殊に世になき御方なれば。心の僻もあるものと。鎌倉方の大名はふつ〳〵。地逢ひも致さぬ故。外の勤の障とて。内より固く堰かるれど冷泉遣手。禿の。目を忍び。言傳にてか文にてか フシハ日に一度は。音信を。せめ事とても候はず。身に代へてもいとほしく。隨分立てて候に。此の四五日は打絶えて御出でとても候はず。フシ文を遣りても。返事なし。定めし是は自らに。持たせ振にてあるらんと少し憎うはありながら。戀が因果で候へば。猶し增し來るゆかしさとフシほろと。泣いてぞ。語りける。地虎も涙を流しなう恨も同じ恨思も變らぬ思なり。自らも十郎樣とは新造の昔より。馴染を重ね參らせて。指切り髮切り入黑子。人目も恥も憚らず。いつぞや和田の大寄にも。一人の母に思ひかへ。たんと心を盡せしは申さぬとても隱れなし。此の心

底の我なるに此の四五日は何とてか。否應のよすがも候はず。されども世の中の男の心はかうしたもの。別の事もあるまいにしや氣遣ひし給ふな。起請も反故になるならば。神や佛もいらぬものなう。浮れ女に實なしとは何處の誰かいひ初めし。あはれかし我々が心意氣をお二人に。スエテ押分けて見せたやな。地今にも來らせ給ひなばいざ言合うて振らうぞや。先づ盃と夕暮にオクリ互のへ思を語らゝフシかゝる折節地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は。朝比奈が言葉の末氣遣にて夜が寢られず。所詮曾我が所緣とあらば根を掘つて葉を枯らさん。先づ虎少將をたらし所緣のあらば尋ねんと。二人篤と談合フシ化粧坂にぞ急ぎける。地はや程もなく着きしかば案内をうて座敷に入る。虎少將は是を見て。やがて座敷を立たんとするを藤太少將が手を取れば。荒四郎は虎が手を取りこは情なし先づ暫くと。よれつもつれつしけれども虎少將はにことも せず。はて先づ放させ御用あらば重ねて と。又立ち上るを引止め。詞これ女郎衆。總じて遊君は全盛して。よき客の數多あるを譽とするとこそ聞いてあれ。和御前達は一風變つて世になき曾我の兄弟に心中立は何事ぞや。いらざる素浪人を不便がらずと我々に懇あれ。これこれなるは荒井の藤太といふ人。某は聞きも及び給はん新開の荒四郎といふ者なり。地御身達の意氣地次第。八幡根引にする氣ざしとフシ鬢かき。撫てぞ申しける。虎くつ〳〵と吹出し。地尤かし皆樣は御大名さうなり殿はよし。何婚からず見ゆれども我々は異な物好にて馬鞍見苦しき曾我殿が。たんといとしく思はれて大名は嫌なり。外をかせぎ見給へといは藤太聞きもあへず。詞扨々ひよんな物好きかな。大名がお嫌にて浪人が好きならば。易い事身ども等もお暇申し浪人致し。地君に思はれ申さんと抱き付けば振りほどき。詞エゝあた輕薄なう虎禮。よしない相手に成り給ふなといへば虎も顏を赤め。地しやほになま見られぬと振り切つて立つを兩人取つて捻据る。詞何なま見られぬとは誰が事ぞ。金銀出して買ふからは見たうなくとも見させて見せん。さあ。地びくとなりとも動いて見よと太刀に手をかけぎゝめけば。宿屋一家は膽を消しこは如何にと騷けども。二人が擬勢に恐れうたへまはりゐる所へ。鬼王彤見を持ち涙と共に來りしか。此の體を見て何事ぞと問ふ。亭主慄ひ〳〵あらましを語る鬼王聞きもあへず。地いや推參なり。狼藉者とする〳〵と駈入り。飛びかゝり兩人が髮束摑んで引伏せ。詞方々は歴々さうなが人體にも似合はず。何ぞ女童を捕へ尾鰭千萬見苦しし。堪忍ならぬ事あらば某が相手にならんと太刀ひねぐつてはつたと睨む。地思ひ寄らねば兩人膽を潰しむづ〳〵と起き。鬼王が顏を怖しさうに打守り。詞扨々世には奥がる者あり。身にもかゝらぬ事にづなう力む男かな。地

尤も仕様は多けれども爰はいうても所わるし。あの様な無法者には構うていらぬものなりと。座敷を立てばいやこれお侍。詞無法者は相手にならぬかそれはひけて見ゆるこれさ。地これさと喚れども聞入れもせず呟きて。足早に歸りもをオクリ笑はぬへ者こそなかりけれ。地扨鬼王は虎少將に近付いて。兄弟の人々討死の次第を語ればやれそれは誠か悲しやと。其の儘其處に倒れ伏し聲も。フシ惜まず泣き給ふ。地涙の隙より虎少將。なう神ならぬ身の悲しさは斯くとも知らで様々に。恨み申せしはかなさはアヽあさましや夢ばかりも知るならば。一所にこそは死せずとも何しに浮世にながらへんと。言ひも敢へず鬼王が腰の刀に取付くを押止めこは如何に。詞尤も御歎は理なれども。地我々さへ御最期の御供を許し給はず。況して女性の御身といひ。誠さほどに思召さば御發心まし〳〵。長く御跡弔はせ給へとさま〳〵に宥めつゝ。地扨我々は御形見を持ち曾我へ罷り歸る處に。詞朝比奈の三郎殿より斯様斯様の御狀故。新開重宗といふ者を討たんため道より歸りて候。地近頃御難儀ながら此の馬と。御形見の品々曾我へ送り屆けてたべ。片時も早く某は鎌倉へ立越えて。二人の奴ばら討ち申さんと語りも敢へぬに虎少將。なう其の荒四郎藤太とは只今の兩人よ。詞なに只今の奴ばらが新開荒井めなりけるとや。地扨口惜しや腹立や天の與を知らずして。やみ〳〵と逃せしかや寶の山に入りながら。手を空しうとは此の事ぞ未だ遠くはよも行かじ。追つ懸け討つて本意を遂げん思へば。思へば無念やと躍り上り飛上り。跡を求めてかけ出づる其の勢は修羅天魔。實に牛頭馬頭の鬼王やと扨恐れぬ。者こそなかりけれ。

虎少將道行　三段目

ハルさりとても。戀は曲者。皆人の。迷ひの淵や氣の毒の。山より落つる。流の身。うき寢の琴の。フシしらべかや。引く手數多に繁けれど。思ひ出すは彼の一人。フシなう戀しゆかしの念力も。かひなき矢先に立つ石の。虎御前少將は形見の駒の口を取り。夫ゆゑ沈む身の行方フシオクリ思ひへやられて哀なり。悉達太子に別れにし。車匿童子が古へは。檀特山の岨傳ひ。健泥駒の諸手綱。腕き涙にくれけるも。それは生きての別れぞや我が身の憂さに比ぶれば。フシ立ちも及ばぬハルル富士の山。ハルフシ裾野の原の。草がくれ。ハルル露の底にや兄弟の死骸のおはすらん。スエテあの藤澤に啼く雁も。フシやよや哀を知るならば。翼につけん一筆をギンオクリ傳へて。門線經暮の鐘の聲寂滅。爲樂と響けども輪廻の。花は散りもせず。ハルいつか火宅の。カン門をさへ。伊豆の。三島に鹽木とる。ギンハルフシ浦の煙の。一むすび。又二むすび。捻れて縺れて。解けて亂れて靡き。大磯フシ君よ小磯。の道。すがらさりし。ハル夕の頃迄も。こゝを通ひてフシ來にけらし。障りありやと黄昏は。さこ

そ駒をもせめて扨。ァ、此の駒よ此の駒よ。なれも心のあるならば。鞭を打たれし恨をも。今は形見と思はずやと二人手綱に縋り付き。口説き給へばさすがげに聞入れたりし風情にて諸膝折りて身振ひし。頭をうなだれ耳を伏せ黄なる。涙を流しつゝ。主の別を歎きしは。人間物を識らぬなり。秋霧の。立野の駒を引く時は。心に乗りて戀しさの昔語となりし世に。たが玉章の箱根山。まだき時雨の椎柴も。涙にそめて赤澤山。鎌倉山の。谷々も影けおさるゝか愛鷹山。刈濺かくなる。臥猪の床に石の枕や苔席。二人かはさば憎からじ。待つ人持たぬ徒歩路の旅。すゞの篠原眞葛が原　小オクリ小菅。蓬生玉葛。オクリ押し分け。掻き分けしどろ。もどろに。しるべなく。主なき駒の。小ウタ馬方いやよほほん〳〵ほ。ほんに〳〵〳〵穂に出でて。逢ふ夜もあり〳〵。鞠子川。其の埋木の埋れ行く。スエテ身の果如何に侘しさよ。御身とても我とても。花ならば初櫻月ならば十三夜。盛に足らぬ身を持ちて思ふ人には添ひもせず。かゝる憂き目を見る事よ。是も誰ゆゑ紫の一本ゆゑのゆかりぞや。歎き給ふな歎かじといさめられてはいさめつゝ。水もらさじと。しめて寢し其の移り香も殘るやと。袖より袖に入れかはし。手に手を取りて行く程に曾我の里にぞ。三道〳〵着き給ふ。フシわきて哀を。地止めしは曾我兄弟の母上なり。祐經を討たんとて二人狩場へ出しより。今日廿日に餘れども兎角の便あらざれば。暫しまどろむ隙もなく明くれば十郎戀しや。暮るれば時致戀しやとスエテ待つ精力も弱り果て。地萬事限りの病の床頼み。少なく成り給ふ。二の宮の姉御前。女房達は集りて樣々に看病し。富士の御狩も過ぎぬる由。やがて目出度く歸り給はん御心安かれと。すかし慰め申せども八十に近き老の波。打臥しものも宣はず。オタリ守り〳〵居るより外ぞなき。地かゝる所へ虎少將。門外に佇みてスエテ涙ながらに案内乞ふ。地折節二の宮の姉出で給ひ。案内はたそと見給へば。あてやかなる女房の悄々として申すやう。これは大磯の虎化粧坂の少將と申す者にて候が。御兄弟の人々敵祐經を討ちは討たせ候へども。斯樣々々の次第にて遂に空しく成り給ふ。御形見を取り持ちてと言ひも果てぬに姉君は。なに兄弟は討たれしとやそれは誠か悲しやと前後も分かず泣き給ふ。二人も涙にくれながらゆに御理我々も。斯樣に樣を變へ參らせ是より如何なる山にも入り。香花を取り御菩提を。弔ひ參らせ度き志それにつき。憚り乍ら御兄弟の御形見に。母君樣の御顔ばせ。一目拜み度う候がと思ひ。入つて望みける。フシ姉君感じ入り給ひ。地誠に各の御事もかねゞ聞きは及びしが。聞きしに勝る人々の心中。返すゞも頼もしけれ。尤も母君に逢はせ度う候へども。兄弟を戀ひわびて今を限りに候に。斯くと知らせしものならば却々命も候まじ。さり

乍ら各の望も無下になし難し。扨如何せん何とかと。暫し思案し給ひしが。ヲヽ思ひ付いたり在りし世の。形見の烏帽子直垂を。虎少將に打着せて暫く是にましませと。門に佇ませオクリやがて〳〵奥に。走り入り 地なう兄弟ここ敵を討ち祐成歸りて候わ。時致歸りて候と誠しやかに宣へば。重き枕を輕々上げなに兄弟が歸りしとや。扨も〳〵嬉しやなとくとく是へ〳〵とて。身のいたはりも打忘れ勇み給ふぞ フシあはれなる。地畫さへうとき。老の目の。黄昏過ぐる檜の。燈に顔をそむけ心までくる憂き涙。押し俯向いてぞ居たりける。母嬉しけに珍しの兄弟や。遂に便りもなかりし故。若しは狩場の流れ矢にも當りて過ばししたるかと。案ぜし憂さの病となり時を待つ間の我が命。ながらへしかひあつて敵討つての對面は。最早や死しても本望ぞや。流石は父の子にてあり。ヲヽでかしたりでかしたり。やれとてもの事に祐經を討つたる體を語り。母をも慰め且は又。冥途にましますに河津殿にも手向け黄泉を照らし參らせよやと。持佛堂の戸を開きはやとく〳〵とぞ望まるゝ。無慚なるかな人々は。御面影も忘れ形見の母の仰を重んじて。はつと答へて立上り聞傳へしをしるべにて。狩場の小野の物語オクリ聞くに〳〵袂も濡れぬべし。

虎少將十番斬

地去る程に建久四年五月雨の。あやめもわかぬ闇き夜に今宵限りとしらま弓。引返さじと一筋に思ひ定めて祐經が。狩場の庵に忍び入り松振揭け見てあれば。ツレ宵の酒宴に醉ひ沈み前後も知らず臥したりけり。太夫浮き木の龜や優曇華の二人地花待ち得たる心地して兄弟思はず打ちうなづき。莞爾と笑うて立つたりしフシ心の内こそ嬉しけれ。太夫地されども寢たる敵を討つては死人を斬るに異らずと。詞如何に祐經。曾我兄弟の者どもなり親の敵見參せよと。地呼ばはる聲に目を覺し起上らんとする所を。左手の肩より右手の肋骨のはづれ迄はらりずんど斬り付けた。地時致すかさず兩膝蹇ぎ。二人二十餘年の秋の風今吹き返す葛の葉の。恨は盡きじと飛上り躍り上つて斬る程に。歩の板に斬り付けて門外に賍け出づれば。すは夜討こそ入りたれと上を下へと返しけり。ツレかゝる處に武藏の國。大樂の平馬之丞と名乘つて物々し曾我殿ばら。參りざふといふまゝに。四尺餘りの大太刀さしかざしてぞ出でたりける。太夫祐成是に在りやとて小柴の蔭よりつつと出で二文字に斬つてかゝる。ツレ言葉には似ざりけり。掻い伏つて逃げて行く。太夫まさなう候平馬殿。いづく迄もと打つ太刀に。二人押附の外れより繋金かけて斬り込まれ。よろり〳〵と引きにける。太夫爰に平馬が姉聟愛甲の三郎と名乘つて出た。ツレ五郎莞爾と打笑みて。紫燕は柳樹の枝に戯れ。太夫白鷺は菱花の蔭に遊ぶと 二人笑ひながら斬拂へば。弓手の腕を打落され跡をも見ずして入つてけり。是を見て安房の國。安西の彌七郎十郎目が

けて渡し合ふ。太夫さしつたりと聲をかけ。ツレ二打ち。太夫三打ち。ツレうつ。二人太刀の音も高紐の外れより。草摺三間切落され。犬居に地どうとまろびしは不便なりけりあさましし。太夫地淺間の嶽か信濃なる舞臼杵の八郎景信時致に。討つてかゝる。ツレ得たりやかしこしあまさじと。三人南無阿彌陀佛の拜み打ち。眞甲二つに割付けられ夕の露とぞ。消えにける。ツレ五番に御所の黑彌吾爰

をば我に任せよと。いかめしけに駈け出づる。　太夫請取つたりやと祐成。　二人横に拂ふ車斬。　四十餘りの髭男。二つに成つて見えければ敵も味方も一同に。さつても斬つたり　地切れ切かないやくどつとぞ褒めにける。　太夫地どよみも未だやまざるに駿河の國の岡部の三郎。　ッレ遠江に原小二郎。　二人二疋連れたる唐獅子の牡丹にすだく如くにて。　隙をあらせず兄弟に電光より猶早く。　煙を立てて。飛

んでかゝるをひらりと外しはつしと受け。ひらりひらりちやう〳〵〳〵。蝶の羽づかひ隼が雉にあひし鳥屋落し。刹那の息をもつがせばこそはらり〳〵と雉ぎ倒し。太刀振りかたけ汗押式ひオクリしばし 太夫息をぞつがれける。 ツレ八番には信濃の國海野の小太郎行氏時致に渡り合ひ。膝口割られて退いて入る。太夫新開の荒四郎此の由を見るよりも。敵は二人ありけるにさもしや方々よ。いで某が討止めて娑婆の暇を取らせんと。小躍りして馳せ向ふ。二人彼奴が廣言憎ければ。微塵になさんと兄弟は飛ぶが如くに切つて出る此の。勢に恐をなし。太刀も刀もいらばこそ。小柴垣を押破り高這ひして逃げけるを。笑はぬ者こそなかりけれ。地其の外群がる兵を。爰に雉ぎ伏せ彼處に斬り伏せ兄弟の手にかけて五十餘人討たるれば手負は三百八十人。爰に又武藏の國の仁田四郎忠綱祐成に渡り合ひ。火花を散らして三重へ戰ひけりされども祐成。地太刀打折つて刀なく指添抜けける其の隙に。忠綱横に雉ぎ拂へば右手の高股切り落され既に最期と見えにける。ツレ地斯くとは知らで時致は御所の間近く亂れ入り。五郎丸といふ童を女と思ひ侮つて。やみ〳〵と生捕られ二十九日の曙に。遂に御前に引出され。太夫宵と。ツレ朝に。二人兄弟は一夜を隔てて富士の根の。裾野の草の露霜と消えて果敢なき面影の。太夫あら戀しの祐成殿や。ツレなうなつかしの時致殿やと。二人烏帽子直垂かなぐり捨てかつぱとまろび泣きければ太夫地母は夢とも辨へずなに兄弟は討たれしとや。是は夢かや夢人かと二人にひしと抱き付き消入り。消入り給ひけり。地二の宮の姉涙を押へ。實に御理さり乍ら餘り兄弟を待ち侘びさせ給ふ御歎の痛はしさに。露の間なりと御心を慰めんとの謀に。則ちこれは大磯の虎御前。此方は化粧坂の少將とて兄弟が思ひ人。形見を持つて來られしを。賴みて斯くはしつらひしと語り給へは母上は。なに方々は聞及びし虎少將にてましますとや。誠に世になき者どもに死後迄不便を加へられ。これ迄訪はせ給ふ事。返す〴〵も嬉しけれ。さはさり乍ら昨日にも。母も空しくなるならば今の憂きめは聞かじものを思へば。思へば方々の訪ふに辛さのまさり草葉末の露と消え失せし。もとの雫の我が身かと又たえ。ツレ入りてぞ泣き。給ふ虎少。將も涙乍ら。地まこと御兄弟の御名殘に。御面影の拜み奉らんと推參致し候處に却つて御歎をかけ奉り候ものかな。さり乍ら御形見の品々此の御文を御覽じ暫し慰み給へとあれば母上文を取上けて。涙ながらに形見の品々扨目錄を披見あり。謂あら不思議や。十郎が手跡にて守刀は祐若に取らすと書いてあり。此の祐若とは誰が事ぞ虎聞きも敢へず。地扨は左樣に候かや。恥かしながら自らが腹に三歳の若ましますを。手越の叔母が許に隱し置かせ給ふといへば。何と〳〵十郎が忘れ形見の有りけるとや。扨も嬉し

やなつかしや。など召連れては來給はぬ。なうはや〳〵と身悶えし。兄弟が蘇り來ると聞く程にオクリ勇みて〳〵使を立てらるゝはや程もなく。地祐若を乳母が抱き來りけり。やれ來たか祐若これへ。これへと宣ひ老母膝にかき抱き。扨も〳〵面さしの能く祐成に似しものかな。嘸や最期に十郎が。此の子の事こそ思ひつらめ。五郎は未だ子もなしとや　何を形見に慰まん。時致とも祐成とも此の孫一人の樂みぞと。歎きながらも祐若が愛らしき手をたゝき。譯も聞えぬうたかたの哀れとも又愛らしゝともフシ云ふ方。もなき涙かな。地されども姉君かひ〳〵しく老母に力を付けんと思ひ。詞いづれもよしなき御歎き。それ侍の家に生まれ又にかゝるは常の習ひ。地誠に彼等は親のため。譽を殘し惜まれて本望達し討たるれば。果報いみじきあやかり者。殊に斯樣の勇ましき世繼のあれば何事も。打捨て悅びおはしませヲヽ。目出度し〳〵〳〵と勇めながらも忘られぬ。會我殿ばらの物語けに。頼もしゝ健氣なり。あはれとも又痛はしゝとも例稀なる敵討やと惜まぬ。人こそなかりけれ。

第四

鬼王團三郎兄弟は。武道の意地を言ひ募り同胞の因を切り。立別つて我れ先にとフシ敵を狙ふぞ頼もしき。地ある時朝比奈鬼王を招き。詞御身知らずや今日新開の荒四郎荒井の藤太兩人。鶴が岡の濱邊にて笠懸を射る由聞きはや團三郎は出てあり。尤も義秀方人して討せ度きものなれども。かく兄弟が張合ひの上助太刀ありと云はれては討つたが討つたに立つべからず。是非兄弟が手に餘らば此の。地朝比奈が控へたり鐵の楯なるぞ。はや急がれよと宣へば鬼王はつと悅び。誠に有難き御懇情生々世々忘れ難し。さあらば御馬一疋拜借仕り度くと申せば安き事それ〳〵と。洗ひ轡に裸馬取る物も取り敢へず鶴が岡へと三重急ぎける。詞いやさ我は兄を持たず。卑怯せられな見苦しいと跡へ取つて引戻す。地いやさそれは當座の意地づく平に許せと引戻せば。又すがつて引戻し二三度四五度せり合ひしが。餘りに强く引据ゑられ團三郎が乘つたる馬尻居にどうど伏しければ。眞逆樣にかつぱと去る程に。地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は。未だ行にはかゝらず遠乘してゐる所へ曾我の郎黨團三郎。詞主の敵一人も遁さじと一文字に駈け來れば。地すは朝比奈こそ後見よと一太刀にも及ばゝこそ跡をも見ずして逃げて行く。詞團三郎是を見て憎しきたなし返せ戻せと兩鎧を合せ追つかける。地鬼王遙かに是を見て南無三寶後れしと一散に駈けつき團三郎が乘る馬の。尾筒を取つて引戻す團三郎大きに怒り。詞只今手詰の境をこは狼藉と怒りける。地やれ拙し團三郎。大事の主の敵弟に先を越され某が立つべきか。初太刀は我に討せよと跡へ取つて引戻す。引き違へて團三郎又鬼王が馬の尾筒にすがり。詞いやさ我は兄を持たず。卑怯せられな見苦しいと跡へ取つて引戻す。地いやさそれは當座の意地づく平に許せと引戻せば。又すがつて引戻し二三度四五度せり合ひしが。餘りに强く引据ゑられ團三郎が乘つたる馬尻居にどうど伏しければ。眞逆樣にかつぱと

落ち巖に胸を打當てて。うんとばかりに息絶ゆる鬼王見返り南無三寶。こは如何にと乘り返し馬より飛下り抱き付きやれ團三郎。團三郎と呼び生け樂樣々用ゆれば。スエテ少し心地ぞ付きにける。地鬼王大きに悅びやれ心は何とありけるぞ。兄鬼王なるに氣を取直せといひければ。團三郎眼を開き溜息をほつとつき。詞なに鬼王殿とやして。敵は討取り給ふか鬼王聞いて。地いやとよ如何に敵が討ち度しとて。目の前そちが落馬してかゝる體を見捨ていかで先へ進まれん。先々御身が心持如何あるぞと云ひければ。兎角もいはず團三郎しばし涙に咽びしが。暫くあつて云ふやうは。扨もく〜冥加に餘る御心底。兄上ながらも恥かしや。誠に如何なる天魔が魅入れ。兄を兄とも思はせず。仲違とはいはせけるぞ。はかなき我が心からは。たとへば兄上かゝる仕儀にて死なさせ給ふを見捨てても。意地を意地に立つべきに今某が體を御覽じ大事の敵を振捨てて御看病なさるゝ事さすが兄上なればこそ。近頃面目なきながら只今迄の慮外をば。眞平御免給はれと手を合せ。てぞ歎きける。鬼王も涙を流しヲ、理なり何が扨。元より連枝の中なれば少しも意趣を殘すでなし。今より心を一つにし。一緒に敵を討取らん先々和殿が養生せんと兄弟打連れ。隱れ家へ空しく歸るぞ。三重〳〵無慚なる。是は扨置き。地新開の荒四郎荒井の藤太重宗は。團三郎に追ひ立てられ危き所を免かれ大息ついで歸り。荒井の藤太いふ樣は。詞兎角彼奴等は命を捨てて狙へばたとひ一旦延びたりとも。地猶此の上が心許なし如何はせんと言へば荒四郎聞きも敢へず。詞エ、それにつき能き思案こそ候へ其の趣は。聞けば虎が腹に十郎が一子ある由いざ此の悴を奪ひ鎌倉へ參り。曾我が郎黨ども此の子を世に立てんため君を狙ひ申すと偽らば。彼奴等は上より探し出され誅せられんは治定なり。然らば世上も廣くならん此の義如何にと言ひければ。地オ、言はれたり企まれたり是に過ぎたる智略なし。さり乍ら虎が方に若し彼奴ばらや忍び居ん。先づ〳〵御身と某只二人忍び行き樣子を窺ひ奪はんと。供をも連れず。笠引き被り庵をさしてぞ三重急ぎける。折節少將。地虎御前祐若を寵愛し。せめては慰み居る所へ新開荒井つつと入り。詞これ〳〵兩人。曾我の祐成が一子これに在る由上聞に達し。急ぎ召取つて參れとのことにて我々迎ひに來りたり。地片時も早くと祐若が小腕取つて引立つる。二人は驚き肝を消し袂や袖に縋り付き。尤も君の上意ならばさもこそあらめさり乍ら。暫く待つて給はれ申し度き事ありと。無體に取付き泣き歎けば流石色には迷ひ易く。詞はて言ひ度き事地あらばと弱々とする體を見て。虎先づ荒四郎が手を取つて。いや別儀にて候はず。祐成は我が君へ何の仇をか致され子供迄の御尋ぞや。假令少しの科ありとも東西わかぬ水子なれば。各々樣のお

心得にて死に失せたりとも御披露あり。助けさせたび給へ七尋の島に八尋の舟を隱すとかや。今生後生の御恩にとッシ手を合せてぞ歎かるゝ。地本より實なき事といひ殊に名に負ふ虎少將。しつほと口說くに二人の者たよ〳〵おろ〳〵ころりとして。詞いやさ我々も不便に思へば御前は如何樣にも成るまじき事にてなし。さり乍ら。方々の心得次第といへば。少將聞き給ひ。いやなう悟れがましく宣ふが。地其の子だに助けて給はらばわんざくれ比丘尼をやめ。如何樣にも御兩人の御心に從はんと誠しやかにたばかれば。扨通つたり〳〵。此の上は何が扨隨分我々精を出し。命を助くるのみならず遂には御前を言ひ直し。曾我の家を立てさせん心安く思はれよと。よい加減につもりあひ先づ日出度いに盃と。差いつ差されつ打寛ぎ暫くへ時をぞ移しける。地酒も半に荒井の藤太いやこれ兩人。して此の庵へ鬼王團三郎は來ざりけるか虎聞き給ひ。されば其の奴ばらは折々冥へ參りしが。兄弟の中をも恥おず我我に濡れかゝり何とも迷惑仕り候。近頃むごき事なれども殺してたべと爲れば荒井につこと笑ひ。エ、しやつめらを殺すは蠅蟲より猶易し。今にも來りてあるならば此の兩人に任されよと。心は怖く思へども。座敷なりの空威嚴フシよそに聞くさへ恥かしゝ。地荒四郎之を聞き尤もそれはさうなれども。詞彼奴ばら如きの下郎めと太刀を合すも如何なり。どこぞにそつと忍び居てとうぞだまして討つやうやあらんと言へば虎聞き給ひ。されば どこに隱しませう所もなしとあたりを見廻す内少將言ふやう。なう究竟の隱し所こそ候へ。只今にも彼等が來らば是非に酒を强ひ醉伏させ候べし。其の内は御苦勞ながらあれなる二合の唐櫃に御忍びましませ。地よき時分に我々が合圖を致さんとあれば智惠薄き二人の者。ふはとだまされ打頷き是に越したる事あらじ。時刻移して彼奴ばらに見付けられては如何なり。いざとて二合の唐櫃へオクリ入りけるへ心ぞ淺ましき。地虎少將立寄りて。蓋をしめんとする處を藤太しばしと押へ。詞いや〳〵油斷は怪我の基。兄弟を仕了する迄は方々が心知り難し。先づ其の錠をこちへこされよ。蓋をも前後へし給へと言へば二人から〳〵と笑ひ。地さつても用心深きお方かな。兎も角もと云ふ儘に錠を二人に相渡し。フシ蓋をも前後にしたりけり。地さる程に虎少將是迄はしつ此の上はそつと落ちてや退かん。兄弟がな來れかし。兎やせん角やと身悶えし フシ足もしどろに落付かず。地かかる折節表の方に轡の音聞えたり。はつと思ひ虎御前。走り出で見給へば朝比奈の三郎義秀なり。こは天の與ぞと兎角の事は打置きて。右の次第を語らるれば朝比奈横手を丁とうち。詞扨扨女人には過ぎたりし智惠才覺いやはや驚き入つて候よ。地たとひ彼奴等が錠鑰取るとも蓋を前後にしたりとも。此の朝比奈が來る

上はと云ひもあへずあたりの大石えい。えいと引起し兩脇にひつ挾み。かろ〳〵と歩み櫃の上にそつと置き。詞やれ横着者ども。仰もなきに上意と偽る其の天罰立所にあたり。女子ども にだまされ扨もよいざま候よ。斯くいふは朝比奈の三郎義秀なり。口惜しくば是へ出され。一太刀合はせ頭を刎ね曾我兄弟が孝養にせん如何に／＼と罵れば。増二人は箱の内にしてこは無念と騒げども。二三十人して持つ石を蓋の上に置きければ釘付よりも猶堅

し。されども荒井大力。うんと云うて押し破れば箱は四方へさばけれど。なにが鋭き大石に押し拉がれて鮓魚の フシ板の如くになりにけり。地荒四郎箱の内より顫ひ顫ひ云ふやうは。詞いやこれ朝比奈殿。某は曾我殿ばらへ敵対したる身でもなし。只今是へ參りしも荒井めに唆はかされ候へば。兎角貴公の御慈悲に。侍一人取立つると思召し密かに命を助けてたべと泣聲にてぞ申しける。義秀腹筋をよつて打笑ひ。なに曾我兄弟に敵對せぬとや。オヽ柴垣破つて逃ぐる程の腰拔が如何で敵對すべき。侮り易き女子供には能くも男だてをしけるな。汝がやうなる腰拔は。侍どものみせしめに殿中にて恥かゝせんと。地若黨どもに云ひ付け絡繩を多く取寄せて。新開が入りし唐櫃を十文字にからげさせ。彼よ是よとする内に鬼王兄弟來りたり。詞朝比奈見給ひやれ方々。論も意氣地も無になつて自業自滅の鼠ども一疋は押にうたれ。今一疋は生捕りたり是こそ曾我の運開き。地いざ此の儘にて御前を經嫌倉中の物笑ひにと死骸と生捕り擔はせて嫌倉さしてえいさつさ。よいさつさえいさつさ。よいさ〳〵よいさつさ ギンよい侍のなれの果。知るも知らぬもやごゑをかけ手を打拍き。身をよぢ悶えて笑はぬ。人こそなかりけれ。

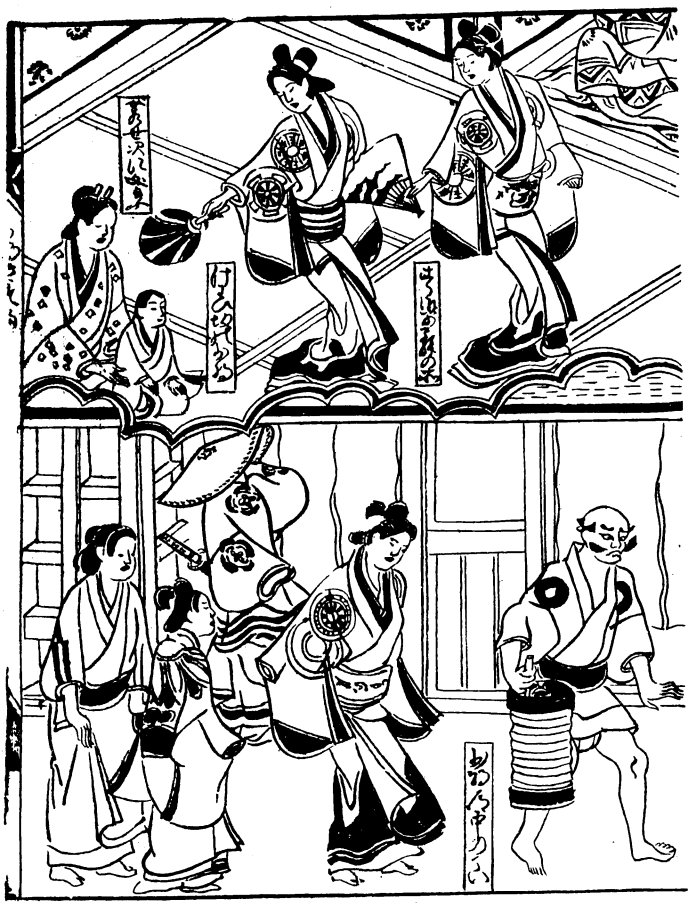
第五

朝比奈の三郎義秀は曾我の祐若虎少將。鬼王兄弟召連れて御前に罷出で。詞是は工藤左衛門を討ちし祐成時致が妻子にて御座候。然るに新開の荒四郎荒井藤太重宗。此の二女が庵へ參り君の上意と偽り。これなる悴を召取らんなどと嚇し苦しめ候故。女童の事なれば當座の難を遁れんとすかしたらし候處に。運命盡きて易々とたばかられ斯樣々の樣子に候と。新開を生捕りの唐櫃。荒井藤太が死骸やがて御前に引出す。地君聞召し扨も憎き仕業かな。先づ其の箱を開き新開めを引出し諸士の中にて面縛させよかし心底の憎さ頭より爪先迄刻みても飽き足らず。地さり乍ら殺せしとて夫の祐成時致の蘇り給ふ道にもあらず。其の上斯樣に殿中にて恥を與へ給ふ上は。討ちたるよりは勝りなん。只我々が望には願はくは出家させ。一枝の花をも摘ませなばせめて利益の便とも。又祐若が所縛とも嬉しと思ふ其の悦び。何か是にはまさり草。菩提の種ともなりやせんとゞエテ事をわけて申さるゝ。地君も道理に歸服あり實に尤も理一なり。さあらば曾我が孝養にとて。御敵免あれば朝

畏つて義秀は。唐櫃の掛繩をはらり〳〵と切りほどき。蓋を開れば新開飛出で逃げんとするを朝比奈とつてあけておとし。脊骨の上をどうぜ踏へ。詞此處にても彼處にても逃尻早き男かな。とても事に御前にて生き首引拔き申さんかといへば君聞召し。オヽ侍の面よごし所領盜人國家の弊。地見るも中々腹の立つ早や討ちへと宣へば。畏つて髻を取り既に危き折節虎少將引止め。詞尤

比奈荒四郎を引立て。詞これ程恥をかく上にも未だ命が惜しきかと。地いへども更に返事せず。袖にて顔を打覆ひ押し俯向いて逃出づればさつても惜しきは命かはと。フシ一度にどつとぞ笑はるゝ。重ねての上意には。曾我兄弟が振舞今かたがたが仁義あつばれ無雙の者どもかな。則ち先祖の知行宇佐美久須美河津の庄祐若に得さするなり。詞扨時致には子の無きとな。然らば兄弟の者どもが假名實名か

たどりて。曾我の十五郎祐時と名乗るべしとしるしの御判を下さるゝ。道の道たる御政法有難かりける次第なり。此の事奥に聞えしかば虎少將が志御意深く感じさせ給ひ。御簾間近く御出あり二人をつくゞ御覽じ。誠に傾城白拍子は頼少く偽多しと聞きつるが。彼等が振舞貞女とやいはん賢女とやいふべき。斯くとは知らで今迄は。遊女はさもしき者と思ひゆかしき事もながりしが。今更彼等が有樣を見



て傾城の戀路のしないと懐かしく見まほししと君へ御訴訟なされ。古への遊女の樣學うで見せよと宣へば。二人は顔を打赤め。今は昔になれ衣かへすぐ＼／も恥かしと幾度辭退申せども。數々のお望に御意も重荷の力なく。お請を申し立ちければ御所のお前に町づくり。數多の遊君召集めすでに用意を三重＼／したりけり。

風流の舞

フシ誠に目なれぬ。風流やと。上下さゞめきあふ中に。深編笠の目に立ちて誰をしのぶの。フシハル頬かぶり。扇をかざし手を引いて。局格子に立ちかかり小オクリ煙草。のめとは。歌かたじけないによほい。よほいよほいほうよほい＼／ほやんれ情の君さまたんだ。今宵との字か。底心それ／＼地フシ九折を急ぐ賤の男が。籠籠の籬に手をかけて。又のお首尾といふもあり。非も報いも後の世もオクリ忘れ＼／はてたる。ばかりなりフシかゝる折ふし。思ひ思ひの紋の傘。指し櫛の歯の引きつれて。ひつこき髪の鬠なしに亂れて物を思へとや。小褄がいどりはら＼／と緋無垢。黄無垢のひまびまに。脛いと白く忍ばしくゆられ。ゆらりと。ゆりかけて。靜かに歩み行くぶりは。天津乙女の舞の袖ギンハルフシ峯に羽をのす。天つ雁。月にとわたる風情して道中。いみじく三重＼／過ぎ越しゝ。フシ猶古への。物語。今樣にこそ謠ひけれ歌廓住居は。時雨の雨よ。降つ濡らしつ。むら村雨の。まだひぬ。露もまだ干ぬやよや。ギン霧は不斷の。伽羅を炷き。晝にもまさる燈火は。月常住のフシ夜店かや。智あるも愚なりけるも。こゝぞ戀路の學問所松風蘿月に。言葉をかはす賓客も。去つて來る事もなく翠帳紅閨に。枕を並べし其の人も口說の嵐に誘はれ。硯の海や謠筆の山。誓紙千束に積れども。浮氣の雲の定めなく。馴れはまさらで戀がますよのフシ世の中は。つらき勤の品々に。節句正月色くらべ。春は柳に桃の酒夏は凉しき菖蒲酒秋の。菊酒。冬は雪見に歌吹けや。松風。あがれや籬なきり＼／＼／。しやんと結んで空に知られぬ殘酒。つけて押へて。あひにあひ竹篠竹の。竹になりたや篠竹にフシ幾夜重ねて書く文に。切つて巻き込む黑髪の。いふにいはれぬとりなりや小オクリ身狹ば、褄高褄短か。裾にはさつと立つ波やばつと立つ波どう＼／＼／。さら＼／さら＼／漣や志賀の山道。うらは紅絹うら小オクリ花の。歌花の吹雪よの。吉野初瀬の。花よりも紅葉よりも。戀しき人は見度いものぢや。色誰ぞ。歌かぶろ。出て見よア、風が吹くフシそれで寢もせで迷ふ夜の。明方告ぐる。鐘の音。根びきの櫻枝折りの。やり梅かぶろのうき名殘。なじめば涙のこぼれ梅。籠籠はそなたに飛梅のしのぎかねにし憂さつらさ。昔語とにほひ梅。のちは小梅の花盛朽ちせぬ中の契なり。かく定めなき遊女の。フシ寄せては返へる波枕。浮きたる舟にたとへしも。今身の上に恥かしや語るも言ふも面ぶせいざ＼／名殘の調子をと。虎少將が調にて拍子を揃へ三重奏でける詞かくてお暇賜はりて親子伴ひ立歸り。富貴の家となりにけり實に有難き忠孝の。威德は千秋萬々歲目出度かりともなかなか申すばかりはなかりけり。

天和三癸亥歳九月吉日
右此本者依小子之懇望附秘密
音節自遂校合令開版也
加賀掾印
京二條通寺町西へ入町
正本屋　山本九兵衞板